

大乘佛教學序論

和田 昌太郎

佛教思想史と云うか、佛教研究の歴史の一端を瞥見して私は今更之に加うべき何ものを持つものではない。然るに今斯に種々のことから考へて暴舉に類する此の事を敢てせんとする、その理由の一つは發表が又研究であると云うことに由るからである。稚拙その極と云うべく且中間報告を出でないそれは諸學の御批判に耐えうるものでは勿論ないが、何卒大方の御叱正を得る事が出来れば私の欣び之に過ぎたるものはない。先學の所説に依りて説述を企圖したのであるが、私の淺學非才、深き思想に及ばず従つて解誤なき事少きを期しがたく、種々の意を含めて斯に謝意を表する次第である。題目につき、學問上の助言を想起するのであるが、所説の性格上そのまゝにしておきたいと思う。

鈴木大拙博士の「即非の論理を生きてゐるもの、これを絶対の二者としておきます。」(佛教の大意)は私の研究に關して示唆する所甚だ大なるものである。私はそこから人格の問題を考えたいと思う。斯かる人格の問題が又私の安心の問題であり、學問の問題に關係しているのではないかと思う。安心の問題は所謂生命の矛盾の自覺と云うものであり、西田幾多郎博士の「論理の矛盾は關心事でない、生命の矛盾こそ我々の重大の關心事である」と云うのも斯かる問題に外ならないと思われる。生命の矛盾は所謂生死の問題であ

り、それは眞の自己の問題でなければならぬ。盤珪禪師の明德に就いての疑いは不生にきまつたと云うことでなければならぬ。

(所謂「佛教が心理にある」と云う所以と考へられる)。眞の自己に徹すると云うことがなければならぬ。其處には現實の問題として人生とか世界の自己矛盾―生命の自覺の問題が成立しなければならぬ。眞の生命は絶対矛盾的自己同一の立場に於いて成立するのである(西田哲學)。其處には自覺がなければならぬ。所謂無自覺の自覺―「體認」と云うものでなければならぬ。斯かる自覺に於いて人格(眞の自己)の成立が論理の自覺(無分別の分別)であるのである。無事は貴人、平常心は道である。大燈國師の億劫相別、而須臾不離、盡日相對、而刹那不對は元是真壁平四郎と云う平常底でなければならぬ。それは佛の呼聲に應ずる私と云うものでなければならぬ。道元禪師の佛の御いのちでなければならぬ。論理はそこからでなければならぬ。即非の論理であるのである(宗教の問題)。佛教史を莊嚴する立教開宗の祖師方その他に敬仰を感じるものであるが、私達は斯かる人格に於いて常に即非の論理に出會うのであるが、それは絶対者(佛)の悲心の表現―大悲からであるのである。所謂其處に佛教(東洋的宗教)の特質があると考へられる。世界の觀智を見る眼は觀智を見る眼でなければならぬ。それは人格でなければならぬ。所謂以心傳心、唯佛與佛の知見であつて「質」の問題に屬するものでなければならぬ。

東洋哲學者の使命に關する示唆に接して、大乘佛教學の問題を自覺するのであるが(大乘佛教學とは如何なるものであるか)、それには論理の深き研究を必要とするのであるが、私は所謂論理の一方向として、それ自身の物の見方考へ方、方法(「大乘佛教學的方法」)

による一つの論理、所謂現實即絕對（大乗佛教）の東洋的論理が自覺されなければならないと思うものである。大乗佛教學の成立する所以である。又それは大乗佛教學の本質でなければならない。宮本正尊博士の「近代では鈴木大拙博士の金剛經による即非の論理。西田哲學の絕對矛盾即自己同一。」（涅槃の諸問題）の兩博士の論理、先德清澤滿之の思想、又其他の論述から斯かる問題への研究上多大の示唆を得る所以である。かえりみて斯かる境遇に遠く及ぶものではないが、我々は斯かる先蹤を媒介として直接なるもの、眞なるものに逆對應しなければならない。かかる逆對應の立場に學者の生命があるのではないかと思うのである。又先蹤の所說の中に斯かる示唆を讀むものであり、佛教學の本質もそれではないかと思うのである。

思想史研究の問題に撞著するのであるが、所謂歴史的現實の論理的構造の問題に於いて、私は現實の世界は生命の本質として即非的に自覺的形成ではないかと思う（歴史の問題）。今は其詳論を避けたいが、そう云う所から所謂「眞」とか「禪」とか云うものを考えてみたいと思うのである。唯、禪の問題であるが、その自覺（日本的）としての日本文化の問題（例えば茶道に於ける「喫茶去」、その他）——宗教と文化の問題（殊に日本文化のそれ）について關心なき能わざるものであるが、寸心博士のその論述（眞の文化は宗教的に成立すると共に、眞の宗教は文化的でなければならない）に敬意を表せざるを得ない。私は斯かる立場（大乗佛教學）から學藝一般をも考えてみたいと思う。凡ては私のかかる立場から成立する（生活の問題）のではないかと思うのである。

今日即今の問題として、國家世界のそれが論ぜられるようである

が、私は斯くの如き諸問題についても常に「かかる立場」から考えるべきではないかと思うものである。凡て物事は其本質に還つて、そこからでなければならない。平和の問題は平和からでなければならない。原子力時代は勝義の意味に於てでなければならない。科學者の配慮について慶意を表する次第であるが、斯かる配慮をして配慮たらしめるものが、かかる立場にあるのではないかと考えられる。宗教の問題についても一般、其處には宗教の本質と云うものが問題になるのではないかと思う。所謂原、水爆彈をして成佛せしめる（宮本博士）と云う思想が佛教のユニークな考え方であるのである。私は私に非ず、故に私である。富嶽は富嶽のまま成佛しているのである。世界はそこからでなければならない。私は斯かる問題が學者の示唆する所謂政治と哲學の問題であり、華嚴教説の集團的生活の實際面への具現の問題ではないかと思う。

自他を顧慮せず甚だ恐縮ではあるが、本學會の意義は、諸先學の自覺によること勿論、餘輩の分に非ずと信ずるが、殊に現世の問題に執着する時、又私も何か共感なき能わざるものがあるのである。諒焉。

此の論述の意圖する所は、歴史的形成的自覺の問題としての大乗佛教の論理的自覺、そこに大乗佛教學の問題があること、即ち大乗佛教學が成立する所以についての説述を企圖したものである。學問は「我々の生活の底から、我々の生き方を論理的に把握せんとする」ものでなければならないとの考えについて其の一端を述べんとしたものである。

論述を反省して、斯に私は種々の意味から忤怩たるものを感じざるを得ない。